



1：ネオルネサンス様式のウィーン自然史博物館

自然史博物館（Natural History Museum）という組織は、いったいいつごろから始まったのだろうか？ 動物や鉱物をコレクションする行為や、それを他人に見せたいという衝動は人間の本能ともいえるので、いろいろな国で古くからその原型はあったのではないかと想像できる。ただ、自然史博物館の成り立ちを、自然科学の歴史の中に位置付けるのであるならば、その起源はヨーロッパに求められる。その生い立ちを簡単にまとめると、17世紀の絶対王権支配と大航海の時代に万物の収集がなされコレクションが充実してゆき、それに続く18～19世紀の近代化の時代に、啓蒙主義や産業革命、そして自然科学の発展を背景に、組織や建物としての自然史博物館がヨーロッパ各国に次々に誕生していったといえるだろう。時は流れて21世紀、時代に即した博物館のあり方が問われているが、「温故知新」とことわざにもあるように、原点を改めて見直すことも大切ではないだろうか。そこで、連載第1回目として、自然史博物館が創られていった当時の空気に触れることができるウィーン自然史博物館を紹介したい。

ウィーン自然史博物館は、日本では知名度が決して高い方ではないが、世界屈指の自然史博物館である。1750年ごろにフランツ一世（マリア・テレジアの夫）がフィレンツェの学者バイユウから購入したコレクションがその起源で、1876年にフランツ・ヨーゼフ一世が設立した帝国自然史博物館が組織や建物としての前身にあたる（ここを起点とすれば博物館としての歴史は約140年ということになる）。

ヨーゼフ一世の治世は、革命によるウィーン体制崩壊から第一次世界大戦までの激動期にあたるが、この時期にウィーンは近代都市へと変貌している。市街中心部を囲む環状道路が整備され、その沿線に国立歌劇場、市庁舎、帝国議会、ウィーン大学、楽友協会などが次々に建造されていった。帝国自然史博物館はこの時代に、そっくり双子のような美術史博物館と向かい合って建造された。ウィーンといえば芸術の都の印象が強いが、この双子の博物館は、自然史資料の財産がこの国の文化の中でどれくらいの比重をもって遇されているかを象徴している。

ところで、ダーウィンの「種の起源」の出版は1859年で、ウィーン帝国自然史博物館の完成の17年前である。生物進化の概念は、当時の生物学や地質学のみならず、人々の自然観をも大きく変貌させたことは言うまでもないが、ウィーン自然史博物館構想にも当然大きな影響を与えた。初代館長 von Hoch-



2 : フランツ・ヨーゼフ一世とバイユウの間での標本のやりとりが描かれたホール階段中央の肖像画

stetter (地質学者)のもと、生物学者のみならず人類学者、民族学者までが、進化論が激しく議論された当時の最新の知識を集結させ展示編成にあたった。このためウィーン帝国自然史博物館はヨーロッパで最初に進化の概念を体現した自然史博物館になったと言われている。

館内に入ると、分類群ごとにホールが区分されており、その膨大な標本の陳列に圧倒される。心なきものは単なる羅列と言われるかもしれないが、この圧倒的な標本の陳列は生物多様性をこれ以上ない形で表しており、当時最新の進化論を取り込もうとした息吹が伝わってくる。まさに、生物多様性についての「百聞は一見に如かず」の展示で、陳列ケースをめぐるうちに大人も子どもも標本をみるまなざしが変化してゆく。その後の学問の進歩に伴う展示改装はあるものの、基本設計は変わることはなく、またほとんどの展示キャビネットは19世紀後半当時のものが使用されている。このように創立当初の状態を今に保つ自然史博物館はヨーロッパにおいてもまれであり、ウィーン自然史博物館はMuseum of Museum (「博物館」の博物館)と呼ばれている。



3 : 肖像画にも描かれているバイユウの標本



4 : 鳥類の展示ホール